

2017.8

(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

8 号

第39巻
No.337



キキョウ *Platycodon grandiflorum* A.DC. （キキョウ科 *Campanulaceae*）

生薬

キキョウ（桔梗根） 秋から翌春の萌芽前に根を掘り取り、水洗、細根を取り除き、陽乾する。乾燥しにくいので外皮を剥いてから乾燥するのもよい。太く、堅く、味が苦く、まっ白の物が良品。

成分

サポニン：platycodinA,C,D,D₂, polygalacinD,D₂、ステロール類： α -spinasterol, stigmasterol、inulinなど。

効能

鎮咳去痰薬として粉末を服用する。主に漢方処方薬で消炎排膿、鎮咳去痰薬とみなされる桔梗湯、排膿散などに配合される。



生薬 キキョウ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



東アジア全域、主に日本全土、朝鮮、中国北部、満州、ウスリーに自生するキキョウ1種からなる単型属。日当たりのよい山野の草原などを好んで生え、草丈40–100cmになる多年草。葉は広披針形で葉縁に鋸歯があり、裏面は白色を帯びます。茎や葉を傷つけると白い乳液を出します。茎頂付近に数個の花をつけ、青紫色で花冠は径4–6cmほどの鐘型、先端が5裂します。園芸的価値が高く、1782年にヨーロッパに紹介され、蕾の膨らんだ形が風船のようで、英名の balloon flower の語源になりました。属学名の *Platycodon* はラテン語の *platy* (広い) と *codon* (鐘の) の合成語で、花の形から名付けられました。種名の *grandiflorum* は大型の花の意です。

秋の七草の一つとされています。秋の野に咲く清楚な花は万葉集によく歌われています。

山上臣憶良(660?–733?)の、秋の野の花を詠める二首

秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花 その一
萩の花尾花葛花瞿麦の花 女郎花また藤袴 朝顔の花 その二

ここで歌われているアサガオは現在ではキキョウとする説が有力です。国内最古の漢和辞典『新撰字鏡』(898–901)にも「桔梗 阿佐加保と云う」とあり、平安時代には万葉集のアサガオはキキョウであると認識していたようです。

桔梗が日本の古文献に初登場するのは『出雲国風土記』(733)で、「諸々の山野に在るところの草木など」の「神門郡」、「飯石郡」、「大原郡」に記載があります。『古今和歌集』(905)には紀友則が「きちかうのはな秋ちかう野はなりにけり白露のおける草葉も色かはりゆく」と詠っています。キキョウは漢字名の桔梗の呉音「ケチキョウ」の転訛で「けちかう」となり現在は「ききょう」となったものと思われます。『延喜式』(927)の典薬寮・諸国進年料雑薬には尾張国の66斤、以下23ヶ国から約589斤の進納があったことが記されています。恐らく野生採取品であったと考えられますが、中には庭先に植えられ、観賞された栽培品もあるのではないかと考えられます。

鎌倉時代に武士が登場すると家紋が用いられるようになり、桔梗の文字の中に「更に吉(さらによし)」の二文字が入ることから縁起をかついだとも言われています。清和源氏の流れをくむ鎌倉幕府の御家人となった美濃源氏の土岐氏が戦の時兜の前立てに野に咲く桔梗の花を挿して戦い、勝利を得たことからキキョウの花を家紋に用いたとも伝えられています。室町時代には美濃守護職を歴任し、その一族に明智氏がいたことから光秀は桔梗紋を用いていました。後の加藤清正や太田道灌、坂本龍馬の家紋も桔梗紋です。

薬としての記載は『神農本草経』の下品に収載され、「味辛微温。胸脇が刀で刺す如く痛み、腹満して腸鳴幽幽(腸がぐうぐう鳴る)し、驚恐悸気の主る」とあり、古くから用いられてきたことは言うまでもありませんが、食用とされたことはあまり知られていません。『救荒本草抜粹』(1828)に「苗はよく茹でよく浸して食うべし。老葉は干していり粉にすべし」とあり、若い茎葉はゆでて水に浸し、サポニンを去って和え物や油いためで、根は同じくゆでて水に晒してから揚げ物、塩もみ、煮物にして食べたようです。また茎葉、根ともゆでて灰汁だした後、乾燥して保存することもできます。朝鮮では根をキムチ漬けにして「トラジ」と言い、盛んに食べられています。

(村上守一 記)